

古代の西因幡

宝木谷の戸島・馬場遺跡では、計画的に配置された大型建物群が発見されています（写真9）。正倉別院など気多郡東部を管轄する郡衙の出先機関としての役割を果たしていたと考えられます。

青谷横木遺跡や青谷上寺地遺跡では、大規模な盛土を行って築かれた古代山陰道が見つかりました（写真10）。都大路と同じく柳の街路樹が植えられ、最高水準の土木技術を用いて建設されました。木簡などの出土遺物から青谷横木遺跡の古代山陰道沿いには、気多郡西部を管轄する郡衙の出先機関が置かれていた可能性があります。



青谷横木遺跡の古代山陰道復元イラスト



写真9 馬場遺跡の大型建物跡
写真提供：鳥取市教育委員会



写真10 青谷横木遺跡の古代山陰道

中世の西因幡

下坂本清合遺跡では、平安時代末から鎌倉時代の屋敷跡が見つかりました。屋敷地内では廂付きの大型建物が確認され、高級食器である漆器も大量に出土したことから、在地領主の屋敷地であった可能性があります（写真11）。

室町時代になると、同じ下坂本清合遺跡で備前焼の四耳壺に納められた埋蔵銭が発見されています（写真12）。埋蔵銭は15,523枚を数え、1枚を除きすべて北宋銭を中心とする中国銭であることが分かっています。

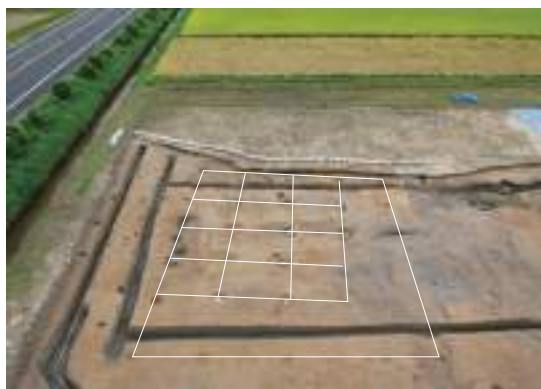
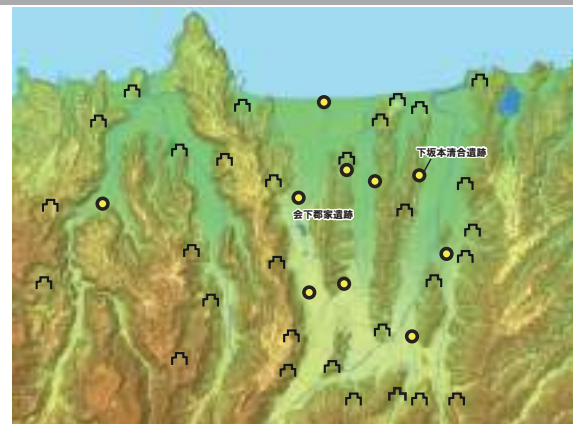


写真11 下坂本清合遺跡の廂付き大型建物跡



写真12 下坂本清合遺跡出土銅印「吉」



中世の主要遺跡分布



写真13 下坂本清合遺跡の埋蔵銭（室町時代）

※戦国時代の西因幡については今秋予定の企画展示や鳥取まいぶん講座で明らかにしていきます。

令和元年企画展



西いなばの遺跡と歴史



西因幡とは、旧気高郡（気高町・鹿野町・青谷町）周辺のことを指します。この地域は古くより栄え、古代では因幡国気多郡と呼ばれる地域でした。近年、鳥取西道路の建設に伴い行われた発掘調査では、重要な発見が相次ぎました。

今回の企画展示では、それらの調査成果を紹介し、西因幡の歴史や成り立ちを紐解きます。

西因幡の地形

西因幡の地形は、中国山地から派生し日本海へと縦に延びる丘陵とその間の谷底平野が畝状に連続している点に最大の特色があります。また、海岸付近には複数の潟湖（ラグーン）が形成されていました。現在では水尻池しか残っていませんが、鹿野城主となった亀井茲矩が干拓した日光池や青谷平野にも『古青谷湾』と呼ぶ潟湖が存在したことが調査研究により明らかとなっています。



青谷横木遺跡の位置

縄文時代の西因幡

縄文時代は、海岸付近に形成されたラグーンや周辺の砂丘地が活動拠点となりました。その一方で、内陸部では落とし穴などによる狩猟や採集を中心に人々は生活していたと考えられます。

青谷平野にある青谷横木遺跡では、縄文時代後期から晩期（4,500～3,000年前）の貝層が厚く堆積し、当時、遺跡の大部分が湖の底だったことが分かっています。ラグーンのほとりでは、全長6mを超える丸木舟が完全な形で発見されました（写真1）。ラグーンを拠点とした漁業活動の一端をうかがうことができます。

逢坂谷の会下・郡家遺跡では、河岸段丘上で落とし穴が複数基発見されています。写真の落とし穴は、四角く、深さが1mほどあります（写真2）。底面の中央に杭を立てた小穴がみられ、中小の動物を捕獲していたと考えられます。



縄文時代の主要遺跡分布



写真1 青谷横木遺跡の丸木舟



写真2 会下・郡家遺跡の落とし穴



鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県鳥取市国府町宮下 1260

TEL 0857-27-6711

FAX 0857-27-6712

ホームページ <https://www.pref.tottori.lg.jp/maibun>

フェイスブック www.facebook.com/tottorimaibun

弥生時代の西因幡

弥生時代になると、内陸部における遺跡数が増加し、水田稲作に伴い生産域が拡大していった様子が見えます。青谷平野では、青谷上寺地遺跡が港湾集落として繁栄を極め、潟湖である『古青谷湾』を拠点として日本海を通じて国内外と盛んに交易を行っていたと考えられます。

青谷上寺地遺跡と関連する集落

勝谷の狭小な谷には弥生時代から古墳時代初めにかけての集落跡が見つかっています（写真3）。この乙亥正屋敷廻遺跡は、谷部からは木製品や建築部材が大量に出土し、なかでも花弁高杯などの木製容器類は青谷上寺地遺跡と類似することから、その関連性が注目されています（写真5）。

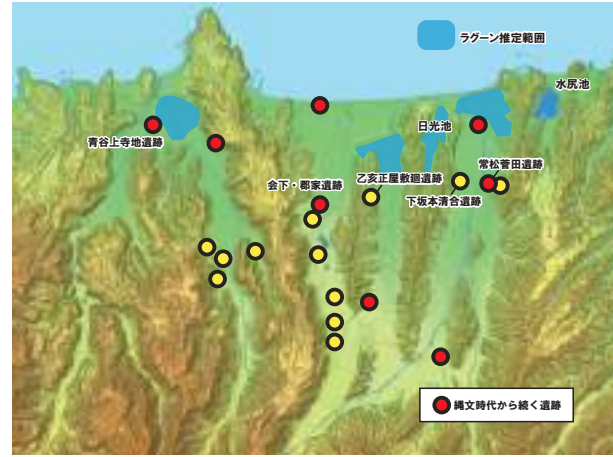
勝谷の首長墓

乙亥正屋敷廻遺跡に隣接する丘陵上には、弥生時代後期の墳丘墓が築造されています。重山1号墓は方形で、貼石を持つ大型の墳丘墓であり、勝谷地域を治めた首長の墓と考えられます（写真4）。

管玉を生産した玉つくり集落

常松菅田遺跡では北陸産の碧玉を使った玉作工房が発見されています。管玉を製作し、工房内では製作時に生じたチップや砥石や石針といった加工道具が出土しました（写真6）。とくに、孔をあける際に用いた石針（ドリル）が数多く出土している点が注目されます。

弥生時代中期に青谷上寺地遺跡では、北陸から原材料の碧玉を交易によって入手し、管玉を生産し、製品を北部九州に供給していました。常松菅田遺跡では、青谷上寺地遺跡のような拠点的な集落から穿孔に特化した工程を下請けして行っていた可能性があります。



弥生時代の主要遺跡分布



写真3 乙亥正屋敷廻遺跡 斜面部の居住域



写真4 重山1号墓（弥生墳丘墓）
写真提供：鳥取市教育委員会



写真5 乙亥正屋敷廻遺跡出土品



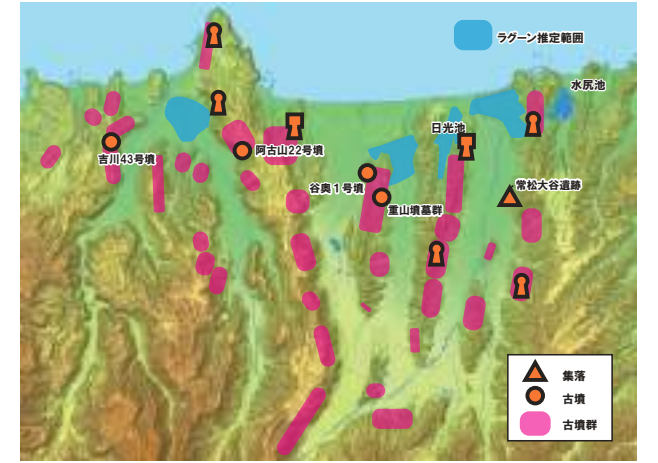
写真6 常松菅田遺跡玉作関連遺物

古墳時代の西因幡

古墳時代には、各谷筋の丘陵上に数多くの古墳が築かれ、小地域単位で豪族による支配が行われました。古墳時代後期では、阿古山22号墳や吉川43号墳で横穴式石室に船の線刻壁画がみられ、海上交通を掌握した豪族の存在が見えます。終末期の谷奥1号墳も海浜部に築造され、銅鏡や馬鐙など国内でも希少な副葬品を持ち、気多郡内では傑出した豪族の墓と考えられています。

近年調査された重山18・19号墳は、35基からなる重山古墳群にあり、古墳時代後期につくられた径10mほどの小規模な円墳です。19号墳の埋葬施設からは、人骨とともに鉄鏃や水晶製の算盤玉、碧玉製の管玉などが副葬品として見つっています。

古墳に対して、集落の様子はよく分かっていませんが、宝木・瑞穂谷の常松大谷遺跡や常松菅田遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物からなる古墳時代後期の集落跡が見つかっています。



古墳時代の主要遺跡分布



写真7 重山19号墳埋葬施設 写真提供：鳥取市教育委員会

古代の西因幡

古代になると、律令国家によって上原遺跡群に気多郡衙（郡役所）が置かれたと考えられます。郡衙を構成する政庁や正倉などの大型建物跡が広範囲にわたり確認されています。上原遺跡群周辺には、有力な古墳がみられないことから、律令国家は従来の豪族の本拠地を避け、逢坂谷の内陸部に地方行政の拠点を置くことで、郡内を統治したと考えられます。

上原遺跡群に隣接する位置には、飛鳥時代の終わりごろに古代寺院（寺内廃寺跡）が造営されます。郡衙と古代寺院は隣接する事例が多く、仏教をもって国を治めるとした律令国家にとって、古代寺院は地方支配にあたり郡衙とともに重要な役割を果たしました。



古代の主要遺跡分布



写真8 寺内廃寺塔心礎

